

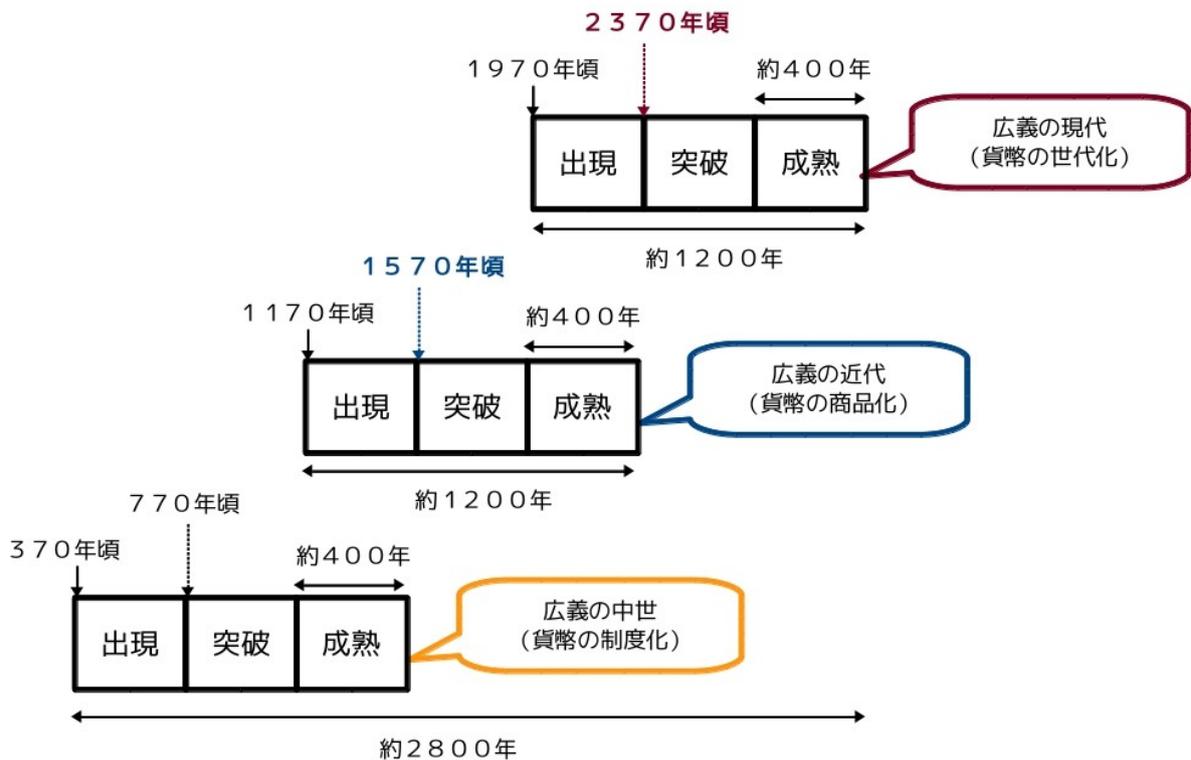
2. レベル4パースペクティヴ

2.1 古代ペルシャ帝国と古代ギリシャ帝国の終焉

商品がなければ市場は成立しない。様々な事物を商品化し、商品から商品を生産する構造(商品Aを消費して商品Bを生産する不可逆な位相構造)が商品経済である。商品経済は商人が仲介する「経済」であるが、生産者と消費者の関係を隠蔽しない。商品経済は市場経済より歴史が古く透明であると言えるが、とはいえ商品経済より歴史の古い「経済」がひとつある。

「商い」は不可逆な商品交換であるが、単純な物々交換ではない。市場経済下であれ商品経済下であれ、ふつう「商い」は貨幣を使用する商行為である。貨幣を使用する商行為、すなわち貨幣経済は市場経済や商品経済より歴史が古い。とはいえ、市場と市場経済がちがうように、あるいは商品と商品経済がちがうように、貨幣と貨幣経済もちがう。そして市場経済や商品経済に起点があるように、貨幣経済にも起点がある。下図(図4)は公文氏の三つのパースペクティヴを拡大して作成した筆者のレベル4パースペクティヴである。

図4 レベル4パースペクティヴ



レベル4パースペクティヴは貨幣経済時代の全体像である。筆者は、このレベル4パースペクティヴを論じながら公文氏の三つのパースペクティヴを論じるつもりであるが、その作業に入る前に貨幣経済以前の人類史、すなわち「古代」史を多少論じたい(筆者は、古代世界の考察が貨幣経済の起源をあきらかにし、また貨幣の妥当な定義につながると考える)。

人類が金属の製錬をはじめたのは紀元前4000年頃で、最初に製錬した金属は金と銅である。人類は紀元前3500年頃から錫の精錬もはじめ、銅と錫を調合して合金＝青銅をつくり様々な青銅器をつくるようになる。人類が銀の製錬をはじめた時期は不明であるが、おそらく錫の製錬をはじめた時期と同じで、紀元前3500年頃である。

人類が農耕や放牧をはじめた時期は金属の製錬をはじめた時期よりかなり古い、とはいえ人類が集落を形成しはじめるのは金属の製錬をはじめた頃とほぼ同じ時期である。そして紀元前2800年頃、人類史にエンメバラゲシという名の最古の王が登場し、紀元前2600年頃、ユーフラテス川下流域で人類最古の都市が誕生した。古代都市ウルクはそのひとつである。

ギルガメシュ王が、ウルクの城壁を築いたと伝えられているが、ウルクの城壁内面積は400～600ヘクタールで、人が居住する集落あるいは「都市」と呼ぶには広すぎる。ギルガメシュ王が城壁を築いた目的はおそらく野獣の囲い込みと家畜化である。古代都市ウルクは広大な牧場で、同時に災害や飢饉、戦火

から逃れた人々のアジール＝避難所あった(ちなみに、日本の還濠集落(縄文時代の三内丸山遺跡等)の面積は数ヘクタールである)。

牛や山羊の囲い込みと家畜化をはじめたユーフラテス川下流域が人類最古の文明＝シュメール文明の発祥地である。やがてメソポタミア各地で牧畜がはじまり、「商い」もはじまるが、商いで金貨や銀貨を使用する場面はなかった。当時の商いで使用する貨幣は物品貨幣(家畜や穀物)である。また、大地は信仰の対象であり、交換＝売買の対象ではなかった。

(人類最古の文明＝古代シュメールで金や銀は貨幣化していない。矢島文夫氏が訳された「ギルガメシュ叙事詩」に金や銀の記述はあるが、金貨や銀貨の記述はない。また、「イシュタルの冥界下り」には金や銀の記述さえない。ウルクの「黄金の剣」は有名であるが、王家の象徴であって「財」ではない)

紀元前2350年頃、アッカドがメソポタミア中部と南部を支配する。アッカドはサルゴン王(在位紀元前2334～紀元前2279年頃)の代に最盛期を迎え、ナラム・シン王(サルゴンの孫。在位紀元前2155～紀元前2119年頃)の代に大地を分割して「土地」に置き換えた。そして家臣に分与する。他方、銀の流通がはじまる。おそらく、銀は土地の「証文」で、分与後の土地を交換＝売買する場面で使われた(ちなみに、ナラム・シンは自身を神格化している。家臣に「土地」を分与する都合上のことであったと思う)。

無限の大地を分割して有限な土地に置き換え分与して交換＝売買を容認する政策の下で、王に拮抗する家臣が登場し、他方、「土地」と無縁な民衆の不満が増大した。ナラム・シン王の死後、アッカドは衰退し、滅亡する。その後紀元前2100～紀元前2000年頃までの約100年間、ウル第三王朝がメソポタミア中部と南部を支配する。

ウル第三王朝の初代王ウル・ナンムは、おそらく人類最古の「法典(ウル・ナンム法典)」を編纂し、他方、古代シュメール期に溯行して土地を「大地」に戻す。メソポタミア中部と南部で土地の分与と交換＝売買がなくなり、その後二代王シュルギが検地を行い民衆＝農民から物品貨幣＝穀物を徴税した。筆者の認識では、この徴税が人類最古の徴税である。「徴税」により、ウル第三王朝が他国から穀物や家畜を略奪する場面がなくなるが、他方、他国からの略奪が恒常化する。そしてシュルギの死後、内紛が勃発した。

ウル第三王朝が銀を徴税する場面はなかった。しかし銀は残る。飢饉が生じた場面で、五代王イビ・シンが多量の銀を放出してメソポタミア北部から穀物を輸入する場面がある。アッカド期に生じた銀の流通が役立ったと言えるが、銀は交換財の役割を十分担っていない。飢饉後、ウル第三王朝は滅亡する。

(日本人が抱くシュメール文明のイメージはウル第三王朝のイメージであるように思う。歴史家の小林登志子氏が多数の著作を書いておられるので、シュメール文明に関心のある方は小林氏の著作を読んでいただきたいと思うが、強調したいことがひとつある。ウル第三王朝は古代シュメールを模倣して土地の分与と交換＝売買を廃止したが、古代シュメールを再現したわけではない。古代都市ウルに古代都市ウルクのような「広さ」はない。ウルクは、牛や山羊を閉じ込めるために城壁を構築したが、ウルは外敵の侵入を防ぐために城壁を構築した。おそらく、アッカド期に都市が「牧場」であった時代が終わっている)

ウル第三王朝滅亡後、ふたつの巨大王朝(イシン朝とラルサ朝)がメソポタミア中部と南部を約200年支配する。その後バビロン第一王朝＝古バビロニアがハンムラビ王(在位紀元前1792～紀元前1750)の代にメソポタミア中部と南部を統一する。

後のアッシリア帝国が徹底破壊したため、古バビロニアの遺跡が残っていない。古代都市バビロニアの正確な位置は今も不明で、ハンムラビ王が家臣に銀を与え土地を分与したか否かもわからない。とはいえ、後の新バビロニア＝カルデアが古バビロニアを模倣して銀貨を鑄造したとの説がある。筆者の想像であるが、古バビロニアはアッカド期に遡行して大地＝無限を土地＝有限に戻し、家臣に銀を与え分与した。

小アジアを支配していたヒッタイトが古バビロニアを滅ぼしたが、ヒッタイトがメソポタミアを支配する場面はなかった。古バビロニア滅亡後、東方から侵入したカッシートがメソポタミア中部と南部を約400年支配し、ミタンニが北部を約300年支配する。

紀元前1350年頃、ヒッタイトがミタンニを滅ぼす。その後ヒッタイトはエジプトと争い、他方、ウガリットがシリアとパレスチナを支配する。メソポタミア北部はアッシリアが支配した。

(ヒッタイトは、ウガリットとアッシリアを「属国」化したようである。ちなみに、有名なハンムラビ法典の碑文が発掘された場所は後のアケメネス朝ペルシャの首都スーサである。当時のスーサはエラム王国の首都で、おそらくカッシートを滅ぼしたエラム王が戦利品のひとつとして持ち帰った)

紀元前1200年前後の人類史に大きな変化(歴史家たちは「カタストロフ」と呼んでいる)が生じた。紀元前1230年頃、ヒッタイトで内紛が勃発し、紀元前1200年頃、「海の民」がペロポネソス半島やシリアの沿岸を襲撃してミュケーナイ(ミケーネ文明)とウガリットを滅ぼす。そして紀元前1190年頃、ヒッタイトが滅亡する(「海の民」のルーツは今も不明であるが、後のフェニキアが「海の民」であるとの説がある)。

ヒッタイト滅亡後、ヒッタイトが占有していた冶金技術＝製鉄技術が東地中海沿岸とメソポタミア各地に伝わる。他方、紀元前1159年にアイスランドのヘクラ火山が噴火し、地球が寒冷化した。その後メソポタミアで「暗黒時代」が約200年続く(ギリシャでは400年以上続いた)。

アッシリアがメソポタミアの暗黒時代を打破した。アッシリアはメソポタミア全域と小アジアを支配し、シリアとパレスチナ、そして短い期間であったがエジプトも支配して人類史上初の「帝国」を建国する。

アッシリア帝国の王は唯一神アッシュルで、大地の神でもある。ウル第三王朝期同様、アッシリアが支配するメソポタミアで土地の分与がなくなる。筆者の想像では、限定された土地(聖域化されなかった土地)

だけが分与の対象になり、王＝唯一神アッシュルの許可が必要になる。おそらく、神官が分与の是非を判断した。

他方、アッシュルに仕える副王(すなわち人間のアッシリア王)が征服した地域の住民を他の地域に強制移動する。それにより「アッシュルの身体(人間のアッシリア王が支配する土地)」を拡大し、反逆を防止しながら版図を拡大して「帝国」を護持する。アッシリア期のメソポタミアで、部族の分断と混合が400～500年続く。

(アッシリア帝国は征服した地域の神像を他の地域に移動することにより住民を強制移動した。それにより新しい「アッシュルの身体」を獲得し、版図を拡大した。筆者の認識では、新バビロニア王ネブカドネザル2世が行ったバビロン捕囚はアッシリア帝国の模倣である。その後アケメネス朝ペルシャや古代ローマが奴隷売買を実施して強制移動を無くし、古代帝国のスキームを再構築する。ちなみに、アッシリア帝国の興亡は紀元前1050年～紀元前950年頃からはじまるが、同じ頃、インドで十王戦争が勃発し、アーリア人がカイバル峠を越えてインド北西部のパンジャブ地方に侵入している。また、中国の王朝が商＝殷から周＝西周に変遷した。しかし、十王戦争で鉄製武器が使われた痕跡がない。また中国で鉄製武器の使用がはじまるのは呉越抗争が勃発した紀元前430年頃である。すなわち、ヒッタイトが占有していた冶金技術＝製鉄技術がユーラシア大陸全域に波及するまで約800年の歳月を要した。余談であるが、作家の井沢元彦氏が、著書「逆説の世界史(小学館)」で「アッシリアの多神教の主なる神であるバアル」と書いているが、間違っている。井沢氏は、おそらく旧約聖書を参照して書いたと思うが、バアルはアッシリア帝国が征服する前にシリアとパレスチナを支配していたウガリットの神である。バアルの偶像は存在するが、アッシュルの偶像は存在しない。旧約聖書は、西暦2～3世紀頃に編纂されたが、編纂者たちはアッシリア帝国の神が唯一神アッシュルであったことを知らなかったように思う。筆者の憶測であるが、一神教のはじまりはアマルナ改革期のエジプト王国ではない。アッシリア帝国である。アッシリア帝国が版図を拡大していた時期に、パレスチナに移動した人々の下でユダヤ教が誕生した)

紀元前600年頃、アッシリア帝国が衰退して滅亡する(原因は内紛である)。その後新バビロニア＝カルデアがメソポタミア中部と南部を支配し、エラム王国を滅ぼす。他方、リュディアが小アジアとメソポタミア北部、メディアがイラン高原やアルメニア等を支配する。

だが、ザグロス山脈中腹(現在のイラン・イスラーム共和国のシーラーズ市付近)で誕生したアケメネス朝ペルシャがキュロス2世(在位紀元前559～紀元前529年)の代にメディアとリュディアを滅ぼし、イラン高原とアルメニア、小アジアとメソポタミア北部を支配する。その後新バビロニアを滅ぼし、スーサに遷都してメソポタミア全域を支配する。

キュロス2世の死後、アケメネス朝ペルシャはシリアとパレスチナ、エジプトも支配した。他方、エーゲ海周辺で古代ギリシャ都市国家が誕生する。筆者の認識では、アッシリア帝国の下で「国体」概念が誕生し、古代ギリシャ都市国家の下で「政体」概念が誕生した。

(歴史家たちは、ユーフラテス川とチグリス川に囲まれたデルタ地帯をひとつにまとめ「メソポタミア」と呼んでいる。他方、考古学者たちは、ナイル川からインダス川までの広い範囲がひとつの経済圏であったと考えている。本書では、ナイル川からインダス川までの範囲を「オリエント地方」と呼ぶ。ちなみに、エジプトのピラミッドはナイル川西岸に集中している。ピラミッドが軍事施設であったと論じる考古学者はいないが、エジプト王国はナイル川を境界にして防衛体制を固めていたように思う。同じことがインダス川とインダス川東岸についても言える。アケメネス朝ペルシャは、オリエント地方全域を支配し、エジプトも支配したが、インドを支配することはできなかった)

古代ギリシャの歴史家ヘロドトス(紀元前485～紀元前420年)は、著書「ヒストリアイ(歴史)」で最初の硬貨＝コインは紀元前670年頃にリュディアが鍛造したエレクトロン貨である、と述べている。その後リュディアは銀貨を鍛造し、新バビロニアが銀貨を鑄造した(以後、本書では鍛造も含めて硬貨＝コインの製造を「鑄造」と呼ぶ)。

アッシリア期のメソポタミアでは、古代シュメール期同様、物品貨幣(家畜や穀物)の下で商いが行われていた。大地は唯一神アッシュルの「身体」であり、交換の対象ではない。しかし新バビロニア王は、おそらく古バビロニアを模倣して大地を区切り「土地」に置き換えた。そして分与する。分与したのは家臣や支配者層、大商人だけであるが、分与する場面で銀貨が使われた。すなわち、銀貨は新バビロニア王が分与する土地の証文である。おそらく、リュディアやメディアも同様である。

メディアとリュディア、新バビロニアを滅ぼしたアケメネス朝ペルシャは支配地域＝版図を20の軍管区に分割する。そして各軍管区が毎年一定量の銀をペルシャ王＝諸王の王(シャーハーンシャー)に献納し、ペルシャ王が銀貨を鑄造して発行する。おそらく、銀貨はペルシャ王が兵士に与える褒賞であった。あるいは、新バビロニア同様、分与する土地の証文であったかもしれない。とはいえ、銀貨と土地を交換する場面はなかった。他方、銀貨と人間＝奴隷の交換がはじまる。それにより帝国＝古代帝国が人間を強制移動する場面がなくなる。

(人間の強制移動を止めたアケメネス朝ペルシャが奴隷制をつくった、とも言える。銀貨と物品貨幣の交換は可能であったかもしれないが、あまり行われなかったように思う。なぜなら、古代社会では、農民や奴隷も土地の一部で、人間労働が家畜や穀物のような物品貨幣を生産するからである。ちなみに、各軍管区の長＝サトラップも銀貨鑄造権を有していたようである。しかし、サトラップが鑄造した銀貨の残存数は少ない。サトラップが銀貨を鑄造する場面はあまりなかったと思う)

ヘロドトスは、ダレイオス1世の代のアケメネス朝ペルシャで各軍管区が献納した銀の量を著書「ヒストリ

アイ」に記載している。表1は、筆者が作成した「ヘロドトスの表」である。各軍管区の正確な地域はわからない。「地域」の列は筆者の推測であるが、小アジア南東(メソポタミア北部)とエジプト、メソポタミア(メソポタミア中部と南部)はおそらくペルシャ王=諸王の王の直領地である。また、銀の代わりに砂金を献納した軍管区はヒンドゥー山脈地帯=ヒンドゥークシュであると考えてまちがいない(ちなみに、1バビロン・タラントンは約34kgで、1エウポイア・タラントンは約26kgである)。

表1		
	地域	毎年献納する銀、その他の量
1	小アジア北西	銀400バビロン・タラントン
2	小アジア南西	銀500バビロン・タラントン
3	小アジア内陸	銀360バビロン・タラントン
4	小アジア南東	銀500バビロン・タラントン + 白馬360頭
5	シリア、パレスチナ	銀350バビロン・タラントン
6	エジプト	銀700バビロン・タラントン + 小麦約11トン
7	ガンダーラ地方	銀170バビロン・タラントン
8	ペルシャ湾東岸	銀300バビロン・タラントン
9	メソポタミア	銀1000バビロン・タラントン + 宦官500名
10	イラン高原北西	銀450バビロン・タラントン
11	カスピ海南東	銀200バビロン・タラントン
12	バクトリア地方	銀360バビロン・タラントン
13	アルメニア地方	銀400バビロン・タラントン
14	ペルシャ湾西岸	銀600バビロン・タラントン
15	イラン高原南西	銀250バビロン・タラントン
16	イラン高原北東	銀300バビロン・タラントン
17	イラン高>>原南東	銀400バビロン・タラントン
18	南コーカサス地方	銀200バビロン・タラントン
19	北コーカサス地方	銀300バビロン・タラントン
20	ヒンドゥー山脈地帯	砂金360エウポイア・タラントン

紀元前4世紀後半、マケドニア王アレクサンドロス3世(アレクサンドロス大王)がアケメネス朝を滅ぼし、古代ペルシャ帝国の版図を支配する。その後各軍管区にギリシャ人植民都市を建設した。しかし農民や奴隷がいなければ「土地」ではない。各植民都市は銀貨鑄造施設を建設し、鑄造した銀貨をマケドニア=ギリシャに送り必要な農民や奴隷を獲得した。

各植民都市がローカルな商行為で銀貨を使用する場面はなかった。また、銀貨を徴税する場面もなかった。各植民都市は、多量の「ペルシャ製ギリシャ銀貨」を鑄造したかもしれないが、ギリシャから農民や奴隷を得るための手段にすぎなかった。

(アケメネス朝ペルシャでは、家畜や穀物のような物品貨幣に利息が生じる場面があっても銀貨に利息が生じる場面はない。しかし古代ギリシャでは、各都市国家が異なる銀貨を鑄造している。そのため銀貨と銀貨の交換が生じ、銀貨と奴隷の交換も生じた。そして、交換の過程でおそらく差益が生じた。他方、ギリシャはエジプトから穀物を輸入している。オリーブ油とパンを交換する場面もあったと思うが、多くの場合、銀貨と穀物を交換したように思う。すなわち、銀貨は食料を得るための手段であった(当時のエジプトは銀貨を鑄造していない。エジプトはギリシャから得た銀貨=銀をペルシャ王に送っていた)。したがって銀貨と食料の交換を重視するプラトンやアリストテレスは、銀貨と銀貨、銀貨と奴隷の交換を嫌い、差益を嫌った。しかしアレクサンドロス3世は銀貨と奴隷の交換を容認したように思う。古代銀貨は貨幣ではない。家畜や穀物が貨幣であるが、とはいえ紀元前430年前後から銀貨と銀貨、銀貨と奴隷の交換がはじまり、銀貨の特殊貨幣化がはじまる。アレクサンドロス3世の東征目的は、多量の銀を獲得して当時のギリシャ銀貨を一元することだったのかもしれない。ちなみに、物品貨幣の「利息」とは、一粒の麦を借りて翌年二粒にして返すとか、一頭の子羊を借りて数年後に二頭にして返すといった類の利息ある。自然の循環と再生が物品貨幣の利息を可能にした。しかし中世に「富(消える自然循環物)」と「財(消えない非自然循環物)」が結合して「富財」になり、物品貨幣と金貨や銀貨が「クラス」を形成する。そして、10世紀前後に物品貨幣が消滅し、利息と差益が結合して「金利」が誕生する)

アレクサンドロス3世の死後、家臣のセレウコス1世がエジプトと小アジアを除く古代ペルシャ帝国の版図を支配する。そしてチグリス川東岸に首都セレウキアを建設した。しかしメソポタミア以東からアム川流

域とヒンドゥー山脈地帯、およびインダス川流域までの広い範囲で反乱が多発したため、シリアに新都アンティオキアを建設して遷都する。セレウコス1世の死後、アム川およびインダス川流域が独立してバクトリア王国を建国する。他方、カスピ海南東でアルサケス朝が誕生する。

セレウコス朝は、アンティオコス3世の代に東征して版図を再現するが、マグネシアの戦いで古代ローマに破れ事実上滅亡する(当時のローマは、カルタゴを滅ぼし、その後ギリシャと小アジアを支配していたマケドニア朝を征服して国力が増大していた。ちなみに、第二次ポエニ戦争でローマ軍に敗北したカルタゴの名将ハンニバルがセレウコス朝に亡命している。しかし、ハンニバルがセレウコス朝ギリシャ軍を率いる場面はなかった)。

アンティオコス3世の死後、バクトリア王国はアム川流域のグレコ・バクトリア王国とインダス川流域のインド・グreek朝に分裂する。グレコ・バクトリア王エウクラティデス1世がインド・グreek朝に侵攻して再統一を目指す。だが不在の間にアルサケス朝の王に即位したミトラダテス1世がグレコ・バクトリア王国に侵攻する。その後グレコ・バクトリア王国は衰退し、北方の遊牧民(トハラ人あるいはサカ人)が侵入して滅亡する。他方、インド・グreek朝はメナンドロス1世=ミリンダ王の代に最盛期を迎える。しかし彼の死後、北方の遊牧民が侵入して滅亡する。インド・グreek朝滅亡後、クシャーナ朝がアム川流域とインダス川流域、ヒンドゥー山脈地帯を含む北インド全体を支配した。そしてカニシカ1世=カニシカ王(在位144~173年頃)の代に最盛期を迎える。

他方、グレコ・バクトリア王国に侵攻したミトラダテス1世はその後反転してイラン高原に侵攻する。ミトラダテス1世はイラン高原を征服し、さらに進軍してメソポタミア南部も支配する。その後ゾロアスター教に改宗して銀貨を鑄造し、第二ペルシャ帝国=アルサケス朝ペルシャを開国した。そして紀元前123年に即位したミトラダテス2世が「諸王の王」を称する。その後ミトラダテス2世はメソポタミア中部と北部を征服し、チグリス川東岸(セレウキア近郊)に新都クテシフォンを建設して遷都する。そして紀元前92年、古代ローマと協定を結び、ユーフラテス川を古代ローマとアルサケス朝ペルシャの境界にする。

だが紀元前53年、古代ローマで三頭政治の一翼を担っていたクラッススがローマ軍を率いてユーフラテス川を越えメソポタミアに侵攻する。アルサケス朝の貴族スレナスが奮戦してローマ軍を撃退し、クラッススは戦死した。だが、その後約300年、古代ローマとアルサケス朝ペルシャ(パルティア)の戦争が続く。この「300年戦争」は、概ねローマの侵略戦争であった。アルサケス朝は疲弊し、サーサーン朝が王位を篡奪する。

(歴史家のシェルドンは、著書「ローマとパルティア(白水社)」で、「ローマが無謀な侵略戦争を繰り返し、その後アルサケス朝より手強いサーサーン朝と争うことになった」と述べている。そしてイラク戦争をはじめたアメリカも古代ローマと同様になるかもしれない、と危惧している。ちなみに、歴史家の山本由美子氏によれば、詩人フェルドウスウィーの著書「シャーナメ(王書)」で登場するペルシャの英雄ロスタムのモデルはスレナスである)

ところで、アレクサンドロス3世とギリシャ軍が東征する約半世紀前のアケメネス朝ペルシャでアラム文字(アルファベット)が普及し、話し言葉と書き言葉がひとつになる。すなわち、言文一致が具現し、文語=古語と口語の併存がはじまる。

識字率がどうあれ、知識人や文化人は文字を学ぶ。だが、伝統的な信仰=ゾロアスター教の祭儀や教典を文語から口語に改めるのは容易でない。他方、外来信仰=仏教等の祭儀や教典は口語に翻訳するしかない。また、新信仰=ミトラ教等の祭儀や教典も口語あるいは新しい文語=ギリシャ語になる。

セレウコス朝衰退後、新たに誕生したアルサケス朝ペルシャで外来信仰と新信仰が広まった。そして紀元前2世紀~紀元前1世紀頃のシリアやパレスチナ、エジプトで外来信仰が広まり、西暦1~2世紀頃に新信仰が広まる。その典型がキリスト教である。新約聖書はギリシャ語の巻物である。しかも旧約聖書より先に編纂されている。

(アルサケス朝期の歴代ペルシャ王は、敬虔なゾロアスター教徒であったが、異教や異端に寛容であった。たとえば、中国で最初に仏典を漢訳したのは外来僧の安世高であるが、僧侶になる前の安世高はアルサケス朝ペルシャの皇太子である。彼は出家してインドに渡り、中国=東漢(後漢)に渡った)

本節の前半で述べたように、アケメネス朝ペルシャは軍管区を制定し、ペルシャ王=諸王の王が各軍管区から毎年一定量の銀を徴収した。とはいえ、各軍管区の長=サトラップは世襲が多く、毎年一定量の銀を献納すれば他は自由である。すなわち、サトラップが軍管区内の徴税権を有し、彼を中心とする評議会が軍管区内の治安や裁判を担っていた。

古代アケメネス朝ペルシャは、地方分権型の帝国であった、と言える。銀貨の鑄造と発行はペルシャ王が概ね独占していたが、銀貨は兵士に与える褒賞であり、また人間=奴隷を売買するための手段=特殊貨幣である(徴収した銀をペルシャ王が神託し、銀貨を鑄造して貨幣化したとの説もある。しかしアケメネス朝期のペルシャでゾロアスター教は国教=治教化していない。筆者は、「神託による銀の貨幣化」説に同意できない)。

アルサケス朝ペルシャは、アケメネス朝ペルシャ以上に分権型帝国になるが、支配体制は古代ギリシャ帝国=ヘレニズム帝国を模倣した。そして土地売買を容認する。アルサケス朝ペルシャで土地売買がはじまり、ペルシャ王から多額の褒賞=銀貨を得た貴族の力が増大した(アルサケス朝ペルシャでは、7大貴族の力が絶大で、ペルシャ王以上に強大な貴族もいた)。

アルサケス朝ペルシャ王は銀貨の鑄造と発行を独占していない。アルサケス朝ペルシャで奴隷売買と土地売買が進展し、同時代の古代ローマでも奴隷売買と土地売買が進展した。アルサケス朝ペルシャは、ヴォロガセス1世(在位51~78年)の代に銀貨にアラム文字を刻む(ちなみに、ミトラダテス1世が発行した銀貨に刻まれた文字はギリシャ文字である)。そして銀貨と奴隷の交換、および銀貨と土地の交換が進

展する。

古代ローマも同様である。だが、226年にペルシャ王位を篡奪したサーサーン朝が帝国体制を刷新する(中国では、秦漢時代に銀貨や銅貨の特殊貨幣化が進展した。三国時代に銀貨や銅貨がどのような役割を担ったかは不明であるが、魏晋南北朝時代の貨幣は銅貨と絹である。隋唐時代の中国も同様である)。

歴史家たちは、「諸王の王」の宗教的権威を高めるためであったと論じている。しかし、復古主義下で幕藩体制を潰した日本は近代国家に変貌した。第三ペルシャ帝国＝サーサーン朝ペルシャも同様である。既存の官僚機構を潰せば新たな官僚機構が必要になる。また、サーサーン朝は版図内の銀山と銀貨鑄造施設をすべて支配し、銀貨の発行を独占して全軍管区の支配も目指した。そのための「手段」として、ゾロアスター教を「国教」化する。

サーサーン朝は、ゾロアスター教の下で多様な土着信仰を糾合し、多様な慣習法を統合した。すなわち、サーサーン朝ペルシャで国教化したゾロアスター教が「諸法の法(最高法規)」になる。そして司祭が官僚＝神官になり、裁判を担う。おそらく、徴税と各地の銀山、銀貨鑄造施設の経営も神官が担った。

第三ペルシャ帝国＝サーサーン朝ペルシャは「国教」を発明し、国教＝最高法規の下で多様な慣習法を統合した中央集権的な帝国＝中世帝国である。そして銀貨が制度になり、「財貨」になる(コラム6)。

(シャープール1世(在位241～272年)の代にゾロアスター教の祭司長に就任したキルデールは国教＝最高法規の下で慣習法を行使する最高裁判長である。古代帝国は三権(立法権、行政権、司法権)が混在一体化していたが、サーサーン朝ペルシャ＝中世帝国誕生後、司法権が突出して立法権と行政権を支配する。しかし12～13世紀頃から立法権が突出しはじめ、17～18世紀頃から行政権が突出し始める。筆者は、本書でその経緯も論じたいと考えるが、ここで強調したいことは、古代帝国に国教に相当するものはなく、最高法規に相当するものもおそらくなかった、ということである。国教も最高法規も中世帝国の産物である。そして、国教＝最高法規の下で銀貨が制度化し、経済空間に貨幣経済が生成する)

コラム6: 祭政一致と政教一致のちがい

国教が存在しない古代帝国の祭政一致と国教が存在する中世帝国の政教一致は異なる。サーサーン朝ペルシャでは、神官が文官を兼務し、銀貨の鑄造と発行、徴税や裁判等を担った。だが神官が武官を兼務して戦場に赴く場面はない。サーサーン朝ペルシャは官僚を武官と神官＝文官に分離し、軍政と民政を分離した。そして軍政と民政を統合する唯一の存在として「諸王の王(シャールハンシャー)」が君臨する。

しかし古代帝国は軍政と民政を分離していないし、官僚も武官と文官に分離していない。たとえば、アレクサンドロス3世に敗北したダレイオス3世は、前ペルシャ王を殺害した軍司令バゴアスが傍流から選び推戴した「諸王の王」であるが、バゴアスは宦官である。ふつう、宦官は軍事と無縁であるが、バゴアスは文官であり武官でもある。

バゴアスは反乱を起こしてアケメネス朝ペルシャから独立したエジプトを再征服する。その後ペルシャ王アルタクセルクセス3世を殺害し、次のペルシャ王アルセスも殺害した。そして傍流のダレイオス3世を推戴する。

おそらく、アルタクセルクセス3世とアルセスの施政に瑕疵があった。だからエジプトで反乱が勃発した。だが、即位後、ダレイオス3世はバゴアスを処刑する(ペルシャ兵たちは、あんな「諸王の王」の下では戦えない、と思ったかもしれない)。

(アッカドを「帝国」と論じる歴史家もいるが、多くの歴史家が、アッシリアが人類史上初の「帝国」である、と論じている。筆者は彼らの言説にしたがって本節を執筆したが、アケメネス朝ペルシャがアッシリアの「国体」概念と古代ギリシャ都市国家の「政体」概念を融合して古代帝国の体制(スキーム)を構築した、と言うべきかもしれない。古代帝国の体制を構築したアケメネス朝ペルシャが、征服した地域の住民を強制移動する場面はない。他方、銀貨と人間＝奴隷の交換が行われた)

アケメネス朝ペルシャ王キュロス2世は、小アジアを征服した後、リュディア王クロイソスを家臣にし、彼の存命と彼の信仰＝アポロニウス信仰を容認した。他方、強制移動された人々を開放して帰還を容認し、神殿や神像の移転も容認する。それにより版図が短期間で拡大した。

(ギリシャ神話に登場するアポロニウスは小アジアの神である。リュディア滅亡後、リュディアの神官たちがギリシャに移住してアポロニウス信仰を残したように思う。筆者の憶測であるが、キュロス2世は新バビロニア王ナボニドゥスやメディア王アスチュゲスの存命と彼らの信仰も容認した)

キュロス2世は、新バビロニアを滅ぼした後、バビロン在住ユダヤ人の移住＝エルサレム帰還を容認した。むしろゾロアスター教を強制する場面はなかったが、「帰還」を強制する場面もなかった。キュロス2世は、メソポタミアに残ったユダヤ人たちに土地を分与し、徴税した。ユダヤ人の知識層を家臣にする場面もあった。

(柄谷行人氏は、アケメネス朝ペルシャが人類初の帝国であると論じている。筆者に異論はないが、柄谷氏は国教もアケメネス朝ペルシャが発明したと認識しておられるように見える。しかし国教を発明したのはサーサーン朝ペルシャである。アケメネス朝期のペルシャでは、ゾロアスター教はたんに王家の信仰であって、国教＝治教ではない。ダレイオス1世の後を継いだクセルクセス1世は、古代ギリシャ都市国家と戦争を繰り返し、その後エジプトを征服したが、彼はゾロアスター教に帰依しない家臣に苦労したようである。また、彼の二人目の妃エステルはユダヤ教徒である。クセルクセス1世の後を継いだアルタクセルクセス1世は、古代ギリシャ都市国家と和解し、ギリシャとエジプトの交易を容認した。そして次のアルタクセルクセス2世の代に太陽神ミスラ、古代シュメールの女神イシュタル(イナンナ)と習合したアナーヒターがゾロアスター教の最高神アフラ・マズダーと同格になる。アルタクセルクセス1世もアルタクセルクセス2世も異教や異端に寛容で、ユダヤ人たちは彼らを敬愛した。旧約聖書のエズラ記とネヘミヤ記からそれを読み取ることができるが、筆者は、アケメネス朝ペルシャがゾロアスター教の下で土着信仰と慣習法を統合する場面はなかったと考える。しかしアルタクセルクセス3世の代に寛容の精神がなくなる。それが、エジプトで反乱が勃発した原因かもしれない。余談であるが、仏教の下でミスラが弥勒(ミトラあるいはマイトレーヤ)になり、ヒンドゥー教の下で阿修羅(アスラ)になる。ヒンドゥー教は古代バラモン教を継承する信仰であるが、誕生したのは中世である。ヒンドゥー教の誕生とイスラーム教の誕生に同時代性がある)

軍政と民政を分離し、武官と文官が同じ中心(皇帝あるいは「諸王の王」)を共有する帝国体制のはじまりが中世帝国のはじまりである。古代帝国は版図の拡大が困難になり、土地の分与が困難になった場面で消滅するが、中世帝国にそのような場面はない。住民を強制移動する場面もない。しかし貨幣経済の進展が人間の移動を促進する。

2. 2 3世紀の「グレート・リセット」

古代ローマでは、執政官(コンスル)が属州民＝自由農民から物品貨幣(家畜や穀物)を徴税し、ローマ市民に分配していた。したがってローマ市民に労働＝農耕等の必要はない。他方、ローマ市民は兵役の義務を負う。古代ローマは、ローマ市民を労働から解放して兵員化し、軍事力を強化して版図を拡大した。そして属州と属州民(自由農民等)を増加していた。

紀元前66年、三頭政治の一翼を担っていたポンペイウスが小アジアのポントス王国を征服し、その後アンティオキアを支配してシリアを属州化する(セレウコス朝が完全消滅したのはこのときである)。ポンペイウスはさらにエルサレムを陥落し、パレスチナも属州化する。他方、カエサルがガリア地方(概ね現在のフランス)を属州化した。だが、クラッススの死後、三頭政治が瓦解して内戦が勃発する。

内戦を征圧して初代ローマ皇帝に即位したアウグストゥス(オクタウィアヌス)はプトレマイオス朝を滅ぼしてエジプトを属州化した。他方、シリアとパレスチナを解放して彼を支援し続けたヘロデにユダヤ王国の建国を認める。だが、ヘロデの死後、古代ローマは再度シリアとパレスチナを属州化し、徴税をはじめめる。そのためユダヤ戦争(西暦66～74年)が勃発した。古代ローマは多数のユダヤ人を殺害してシリアとパレスチナの属州支配を維持する。そして各属州に軍団を置く。エルサレムには一個軍団が駐屯した。

ダキア地方(概ね現在のルーマニア)を除けば、五賢帝時代(1世紀末～2世紀後半)の古代ローマは版図をライン川以西のガリア地方やブリタニア地方(現在のイングランドやフランスのブルターニュ地方等)、イベリア半島全域、ドナウ川以南のバルカン半島全域と黒海南西岸、およびクリミア半島沿岸、ユーフラテス川上流以西、そして小アジア全域とサハラ砂漠以北＝北アフリカ全域に拡大した。

社会学者たちは、ローマ市民が住む版図内の各都市を「中心」と呼び、属州民が住む地域を「周辺」、版図外を「外部」と呼んでいる。そしてこの「中心－周辺－外部」のスキームを「帝国」と呼んでいる。だが、この古代ローマのスキーム＝古代帝国は3世紀に瓦解する。

212年、ローマ皇帝セウェルスが死去し、彼の息子カラカラ(ルキウス・セプティミウス・バッシアヌス)が即位する。即位後、カラカラは勅令＝アントニヌス勅令を発令して奴隷を除くすべての属州民にローマ市民権を与えた。それによりローマ軍が巨大化する。

アレクサンドロス3世を信奉していたカラカラは、大軍の力で版図外の富財を略奪し、新生ローマの建設を目指した。だが、アレクサンドロス3世とちがいで、カラカラは姑息であった。カラカラはオスロエネ王国の王を騙し、メソポタミア北部を属州化する。同じ手口でアルメニア王国の王族も騙し、現在のグルジアとアゼルバイジャン、アルメニアを含む南コーカサス地方を属州化しようとする。しかしアルメニアの民衆が反発した。カラカラはローマ軍を派兵して属州化を強行するが、ローマ軍は敗退する(カラカラに騙されたオスロエネ王アブガル9世はキリスト教に帰依していたようである。また、キリスト教を国教化した最初の王国はアルメニア王国である)。

にもかかわらず、カラカラはその後アルサケス朝ペルシャに進軍して版図を拡大しようとする。戦闘は216年にはじまったが、翌217年、カラカラは部下に殺害された。そして218年、古代ローマはアルサケス朝に和睦を要請する。アルサケス朝は応じたが、カラカラの死に便乗して版図を拡大するチャンス逃したとも言える。ペルシャ国内に不満が鬱積した。

224年、サーサーン朝がペルシャ王位を篡奪する。そして初代サーサーン朝ペルシャ王アルダシール1世の死後、彼の息子シャープール1世が「諸王の王」に即位して古代ローマとの戦闘を再開する。259年、シャープール1世率いるサーサーン朝ペルシャ軍がエデッサの戦いで当時のローマ皇帝ウァレリアヌスを捕縛し、首都クテシフォンに連行した。その後古代ローマで「3世紀の危機」が勃発する。

260年、ガリア地方とブリタニア地方、イベリア半島とその周辺が独立してガリア帝国を建国する。さらにサーサーン朝ペルシャの侵攻を阻止していたローマ軍東方司令オダエナトゥスの死後、彼の妻ゼノビアが小アジア東部とシリア、パレスチナ、エジプトを支配してパルミラ王国を建国する。古代ローマは三つに分裂した。

273年、ローマ皇帝アウレリアヌス率いるローマ軍がパルミラ軍を撃退してゼノビアを捕縛する。翌274年、ガリア帝国が自壊し、古代ローマは「3世紀の危機」を脱した。しかし古代帝国のスキームは再現しなかった。すなわち、アントニヌス勅令下でローマ市民権を得た旧属州民がローマ市民権を手離す場面はなかった。そのため古代ローマは財政難に陥り、サーサーン朝ペルシャと同様な中世帝国に変貌する(以後、古代ローマを「ローマ」と呼ぶ)。

メソポタミア全域を支配したサーサーン朝ペルシャ王シャープール1世は、アルメニア王国も支配し、さらなる版図の拡大を目指す。サーサーン朝ペルシャ軍は西方でローマ軍と交戦し、東方でクシャーン朝軍と交戦した。精強なクシャーン朝軍に苦戦したシャープール1世は中央アジアの遊牧民エフタル(フーナ)と同盟を結び、クシャーン朝を挟撃する。

サーサーン朝ペルシャはホラーサーン地方(概ね現在のイラン北東部とアフガニスタン北西部、トルクメニスタン南西部)を占領し、エフタルはクシャーン朝を滅ぼしてバクトリア地方(アム川流域)とガンダーラ地方(インダス川流域とヒンドゥー山脈地帯)を占領した。だが、その後エフタルがサーサーン朝ペルシャに敵対する。

他方、ローマでは、284年に即位したディオクレティアヌス(在位284～305年)が軍政を東西分割し、北方の守備(ゲルマン人の侵入等からの防衛)と北アフリカの統治を共同皇帝マクシミアヌスに委ねた後、

東方のサーサーン朝ペルシャと対峙する。そして297年、副帝ガレリウス率いるローマ軍がサーサーン朝ペルシャ軍を破り、メソポタミア北部と中部を奪取してアルメニア王国を解放する。その後ディオクレティアヌスが和議を成立させ、有利な条件で境界を定めた。

サーサーン朝ペルシャの動向を抑止した後、ディオクレティアヌスは軍政と民政を分離し、民政を中央集権化する。そして人頭税を制定した。以後、ローマの税収がもっぱら人頭税になる。

(カラカラが発令したアントニヌス勅令により、属州民の大多数がローマ市民になる。そのため属州民の納税＝農税が事実上消滅した。すなわち、人頭税の目的は農税の補填あるいは代替である。他方、人頭税を徴税するには民政と軍政の分離、そして民政の中央集権化が不可欠であった)

ところで、アレクサンドロス3世を信奉していたカラカラは、銀貨の交換差益を嫌ったようである。即位後(アントニヌス勅令を発令する少し前)、カラカラは純銀含有量を大幅に削減した新ローマ銀貨を発行する。カラカラの死後、ローマ銀貨の純銀含有量はさらに低減し、事実上の銅貨になる。ディオクレティアヌスが皇帝に即位した頃のローマは、銀貨と土地の交換ができなくなっていたかもしれない。

ローマも、古代ギリシャや古代アケメネス朝ペルシャ同様、家畜や穀物が「貨幣」である。銀貨の特殊貨幣化は進展していたが、銀貨と物品貨幣を交換する場面はなかったし、その必要もなかった。したがって銀貨と土地や人間＝奴隷の交換ができなくなっていたとすれば、銀貨の価値は小さい。

(作家の塩野七生氏は、カラカラ後のローマでインフレが勃発したと論じておられるが、貨幣の資本的使用価値が低減する現代のインフレとは性質がちがう。ローマのインフレは制度危機である。銀貨の純銀含有量低減が銀貨と土地や奴隷の交換を困難にし(だから、カラカラはアントニヌス勅令を発令したわけだが)、銀貨が制度的信用を喪失するインフレである)

ディオクレティアヌスは純銀含有量100パーセントの新銀貨を発行してローマ銀貨の制度的信用を回復しようとする。そして銀貨で人頭税を徴税した(すなわち、徴税を物納から金納に変更した)。だが、版図内の銀山が枯渇していたため、多量の純銀含有量100パーセント銀貨を鑄造できなかった。新銀貨の発行量は不十分で、ディオクレティアヌスの金融財政政策は破綻する(他方、サーサーン朝ペルシャは純銀含有量70パーセント以上の銀貨を鑄造して発行し続けている)。

ディオクレティアヌス退位後、ローマで内戦が勃発する。内戦を征圧して即位したコンスタンティヌス1世(在位306～312年)はディオクレティアヌスの改革を継承する。だが、彼は新銀貨の発行を断念し、代わりに新金貨＝ソリドゥス金貨を鑄造して発行した。そして新都コンスタンティノーブルを建設し、キリスト教を公認する。

(現在のイスタンブルがコンスタンティノーブルである。古代ギリシャの都市国家メガラがマルマラ海西岸に植民都市ビュザンティオンを建設したが、コンスタンティヌス1世がローマ都市に改造して命名した。ちなみに、黒海とマルマラ海をつなぐ海峡がボスポラス海峡で、マルマラ海とエーゲ海をつなぐ海峡がダーダネルス海峡である。マルマラ海の面積は瀬戸内海の半分程度である)

ローマは、以前から金貨を鑄造して発行していたが、金貨が銀貨を代用する場面はなかった。筆者の認識では、当時のローマ金貨は「メダル」である。金貨と銀貨を交換する場面はほとんどなかった。しかしコンスタンティヌス1世は新銀貨の代用物として新金貨を発行する。コンスタンティヌス1世の新金貨発行は大きな賭けであったが、「賭け」は的中した(ちなみにインドでは、クシャーナ朝が金貨を鑄造して発行している。2世紀後半～3世紀前半のインドで、金貨と銀貨を交換する場面があったかもしれない)。

ローマが新金貨を鑄造して発行した後、サーサーン朝ペルシャで金貨と銀貨が併存するようになる。当時、ローマとサーサーン朝ペルシャは敵対していたが、信仰集団間の信用関係が交換を具現したように思う。おそらく、キリスト教会とゾロアスター教会が相当量のローマ金貨とペルシャ銀貨の交換を仲介した。ローマで金貨が財貨になり、その後銀貨も財貨になる(コラム7、コラム8)。

(新バビロニアは銀貨を鑄造したが、金貨を鑄造していない。古代ギリシャ都市国家も金貨を鑄造していない。アケメネス朝ペルシャは、ダレイオス1世の代にダリウス金貨＝ダリックを鑄造して発行したが、ダリウス金貨は金貨というより金そのものである。筆者の認識では、最初に金貨を鑄造して発行したのは古代ローマである。とはいえ、クセノポンの著作に金貨は登場しないが金はたびたび登場する。また、銀貨を鑄造していないエジプトで金が流通していたし、アレクサンドロス3世の父フィリップpos2世はパンガイオン山で産出する金を分配してマケドニア軍を編成した。古代ギリシャでもアケメネス朝ペルシャでも、金は「財」として流通していた。もしも新ローマ金貨＝ソリドゥス金貨の純金含有率が十分高ければ、ペルシャ銀貨との交換は可能である。必要なものは、純金含有率の高い金貨を鑄造する技術である。筆者の憶測であるが、当時のキリスト教会が技術を有していた。したがってコンスタンティヌス1世のキリスト教公認と新金貨発行は表裏一体である。ちなみに、コンスタンティヌス1世はアリウス派キリスト教徒であった。そしてコンスタンティヌス1世の死後、ローマ皇帝に即位した彼の次男コンスタンティウス2世がコンスタンティノーブルからアタナシウス派キリスト教会を追放する。しかしコンスタンティウス2世の死後、新ローマ皇帝に即位した彼の甥ユリアヌスがアタナシウス派のコンスタンティノーブル帰還を認める)

コラム7: ローマ金貨とペルシャ銀貨

古代ローマでは、エジプトは皇帝の直屬領で、エジプトの富＝穀物等と財＝金はすべて皇帝の「富財」である。カラカラはアントニヌス勅令を発令してローマ市民＝兵員を増員し、ローマ軍を巨大化したが、増員した兵を養うだけの富財は十分あったと思う。

カラカラは純銀含有量を50パーセント強に落とした新銀貨(それまで、ローマ銀貨の純銀含有量は100パーセント弱であった)を発行したが、アルサケス朝ペルシャは純銀含有量70～80パーセント以上の銀貨を鑄造して発行し続けている。サーサーン朝ペルシャも同様で、そのためペルシャ人がエジプト等の土地を「買う」場面が生じた可能性がある。それが、ディオクレティアヌスが純銀含有量100パーセントの新銀貨を鑄造して発行し、人頭税を制定して銀貨を徴税した本当の理由かもしれない。

しかし、当時のローマは版図内の銀山が枯渇していた。コンスタンティヌス1世が鑄造して発行した新金貨＝ソリドゥス金貨がペルシャ人の土地買収を抑制し、他方、ペルシャ銀貨の獲得を容易にして銀貨の徴税を可能にしたように思う。

当時、ローマは北アフリカとエジプトを支配し、アフリカ(おそらく現在のスーダン)で産出する金を得ていた。筆者の憶測であるが、新ローマ金貨＝ソリドゥス金貨を鑄造した場所はコンスタンティノープルとアレクサンドリアである。

他方、前節で記載した「ヘロドトスの表」から察するに、サーサーン朝ペルシャは銀山を保有していたが金山を保有していない。アケメネス朝ペルシャ時代に金を産出していたヒンドゥー山脈地帯はサーサーン朝ペルシャの版図外であった。しかしインドや中国の物産(綿織物や絹織物)を得る場面で金や金貨が必要な場面がおそらくあった。

(サーサーン朝ペルシャがエフタルと同盟を結びクシャーン朝を挟撃したのは、金山を得るためだったのかもしれない。したがって、クシャーン朝滅亡後、エフタルがバクトリア地方とガンダーラ地方を支配したのはサーサーン朝ペルシャの誤算であった。エフタルが金や金貨に関心を持つ場面はなかったと思うが、とはいえエフタルに占領した支配地をサーサーン朝ペルシャに譲渡する考えもなかった)。

とはいえ、ローマとサーサーン朝ペルシャは敵対している。したがってキリスト教会とゾロアスター教会がローマ金貨とペルシャ銀貨の交換を仲介した。当時のキリスト教の中心地はシリアのアンティオキアで、アレクサンドリアでもキリスト教が拡大していた。そして、キルデールが死去し、サーサーン朝ペルシャの異教弾圧が緩くなっていた。しかも301年にアルメニア王国がキリスト教を国教化し、サーサーン朝ペルシャと良好な関係を築いていた。

コラム8: 貨幣経済と貨幣クラス

アケメネス朝ペルシャがダウ船を発明した。その後陸路と海路の両面でペルシャとインドや中国の交易が活発化し、言文一致が具現したように思う。

(筆者の知る限り、言文一致は商売の都合上の出来事であったと論じる言語学者や文学者、哲学者はいない。彼らは、歴史家の言説に耳を傾けていない。歴史家の言説に耳を傾けない人々にとって、言文一致は自明の「理」であるようだ)

アルサケス朝期になっても、ペルシャとインドや中国との交易が続く。そのような状況下で、サーサーン朝はゾロアスター教＝最高法規の下で慣習法を統合し、ゾロアスター教会を統治機構化して銀貨を制度化した。そして銀貨と物品貨幣が漠然とした集合を形成した。

ローマも同様であるが、おそらくディオクレティアヌスの税制改革(人頭税や徴税の金納化等)が契機になる。コンスタンティヌス1世の代に金貨と物品貨幣が漠然とした集合を形成した。そしてテオドシウス1世(在位379～395年)の代にアタナシウス派キリスト教を最高法規化し、アタナシウス派キリスト教会を統治機構化する。

(アタナシウス派キリスト教＝最高法規の下で、慣習法の統合と体系化がはじまる。438年、テオドシウス法典が完成した。古代ローマは、紀元前449年に十二表法を制定している。その後約900年の歴史過程で様々な慣習法を制定した。テオドシウス法典の完成は最高法規の下での慣習法の統合と体系化を意味するが、体系化が十分でなかったように思う。慣習法の体系化はユスティニアヌス法典＝ローマ法大全の完成まで待つことになる)

テオドシウス1世の代からローマ金貨とペルシャ銀貨の交換が本格化する。国教会(アタナシウス派キリスト教会とゾロアスター教会)がローマ金貨とペルシャ銀貨の交換を仲介したが、「交換」は等価交換に準ずる等比交換であった。アタナシウス派キリスト教会とゾロアスター教会は、「全世界の金の価値と全世界の銀の価値は等価である」という観念をおそらく共有した。筆者は、そのような「想像の産物」の下でローマ金貨とペルシャ銀貨の等比交換が具現したと考える。

「想像の産物」の下で、国教会は金融も営んだ。国教会の下で金貨や銀貨が財貨＝統治制度になり、財貨が土地や奴隷を財産化して土地売買や奴隷売買に関与する人々が増大する。そして荘園＝古典荘園が誕生した(国教会も土地売買や奴隷売買に関与し、荘園を保有した)。

ローマ金貨とペルシャ銀貨の交換関係の下で、ローマ金貨とペルシャの物品貨幣の交換が生じ、ペルシャ銀貨とローマの物品貨幣の交換も生じる。そしてローマの物品貨幣とペルシャの物品貨幣の直接的な交換、すなわち帝国間の「物々交換」が消滅する。

その後ローマ金貨とローマの物品貨幣がクラス＝貨幣クラスを形成し、ペルシャ銀貨とペルシャの物品貨幣がもうひとつのクラス＝貨幣クラスを形成する。そして財貨と財貨の交換関係が貨幣クラスと貨幣クラス(金貨クラスと銀貨クラス)の交換関係(数学的には要素間の全単射が可能な真クラスと真クラスの関係)に進展し、貨幣経済を形成する。

貨幣経済の数学的基本構造は順序構造であり、交換関係は等価交換に準ずる等比交換である。貨幣経済の下では、どれだけ有用でどれだけ希少な事物であっても、物品貨幣化して貨幣クラスのメンバにならない限り交換＝商いの対象にならない。他方、売り手と買い手の関係は対称で、対称性の継続が商人の信用になる。「広義の近代」の出現期に、経済空間に位相構造＝商品経済が生成して売り手と買い手の関係が非対称化するが、順序構造＝貨幣経済は残り、「信用」も残る。

(筆者は、ローマ金貨とペルシャ銀貨を交換する場面で差益＝クラス間交換差益は生じなかったと考える。他方、クラス間交換差益をなくしたことが、順序構造＝貨幣経済の形成につながる。ちなみに、クラス間交換差益と為替差益は異なる。為替差益は、銀行間取引の下で金利が貨幣の資本的使用価値を担いはじめたときに生じた「差益」で、起点は18世紀である。資本主義社会では、為替差益と金利は表裏関係にある。したがって、為替差益と金利を同様なものであるかのように論じる経済学者やエコノミストもいる。とはいえ、資本主義社会では、為替差益が縮小した場面で金利が露呈し、金利が縮小した場面で為替差益が露呈する。為替差益が貨幣の商品的側面に依存し、金利が貨幣の道具的側面＝資本的使用価値に依存するからである。為替差益と金利が表裏関係にあるとしても、ちがいは大きい)

ふたつの中世帝国の存在が貨幣経済が生成する必要条件で、ふたつの財貨(あるいはふたつの貨幣クラス)の存在が貨幣経済が生成する十分条件である。ユーラシア大陸西部ではローマとサーサーン朝ペルシャが存在した。同時代のユーラシア大陸東部＝中国は魏普南北朝時代である。当時の中国に北魏と宋が存在した。北魏の財貨は絹で宋の財貨は銅貨である。

ところで、国教会は異端や異教を敵視したが、観念的な理由で敵視したわけではない。国教会＝統治機構が異端や異教を敵視した理由は国教＝最高法規と財貨＝統治制度の護持である(さらに荘園と奴隷労働の維持である)。

とはいえ、国教は土着信仰を糾合し、土着の掟＝慣習法等を統合する。そして変貌する。キリスト教は一神教であるが、国教化したキリスト教は何人もの天使や聖人をつくり、何人もの悪魔や魔術師をつくった。仏教は多神教であるが、国教化した仏教は神性をひとつにする。ゾロアスター教もおそらく同様である。筆者は信仰に疎いが、一神教の多神教化や多神教の一神教化は国教会が「法」や「制度」を担う都合上の出来事であったと理解したい。

しかし宗教家や哲学者たちは、天使や悪魔がたくさんいる一神教が多神教でないこと、最高神が存在する多神教が一神教でないことをそのように説明しない。むしろ重視すべきことは、一神教であれ多神教であれ、国教化した信仰が持つ異様な政治性と暴力性である。筆者の見るところ、宗教家や哲学者たちは国教と非国教のちがいを、および国教の政治性と暴力性に深くコミットしていない。

たとえば、故吉本隆明氏や中沢新一氏は、国教と非国教のちがいを深く考えていないし、国教の政治性と暴力性も深く考えていないように思う。オウム真理教が国教を目指していたのはあきらかであるが、吉本氏も中沢氏もオウム真理教のそのような側面を見落としていた。

そして残念なことに、経済学者やエコノミストたちが、それが国教＝最高法規に由来するかもしれないと考えることなく貨幣の神秘性(あるいはフェティシズム＝物神崇拜)を論じる場合がある。彼らは信仰を国教と非国教に仕分ける必要があると考えたことさえおそくない。

2.3 「広義の中世」と「広義の近代」、「広義の現代」

ディオクレティアヌスの軍政と民政の分離、軍政の東西分割と民政の中央集権化によりローマの防衛と治安が強固になる。他方、武官や文官の人数が増大して官僚機構が肥大化した。そして人頭税が民衆の負担を増大し、自由農民が減少して荘園が巨大化する。その後コンスタンティヌス1世が新金貨を発行し、キリスト教を公認する。

361年、コンスタンティヌス朝最後の皇帝ユリアヌスが即位した。ユリアヌスは腐敗と華奢を嫌いアリウス派キリスト教会と対立する。そして形骸化した元老院を再生して減税を実施し、五賢帝時代の政体と古代ギリシャ文化の再現を試みるが、ペルシャ戦役で戦死する(コラム9)。

ユリアヌスの死後、364年に即位したウァレンティニアヌス1世はユリアヌスの政策(アタナシウス派の司教や司祭のコンスタンティノープル帰還等)を継承したが、その頃からフン族が移動しはじめ、ゲルマン人の大移動がはじまる。そして378年、フン族に押されたゲルマン人＝東ゴート族がドナウ川を越えローマ版図内に侵入した。東ゴート族はアドリアノープル(現在のエディルネ)を襲い富財を略奪する。

当時のローマ皇帝テオドシウス1世がトラキア地方北部を割譲し、東ゴート族の略奪を制止した。他方、彼はコンスタンティノープルからアリウス派の司教や司祭を追放し、古代オリンピックを廃止して「異教」を排除する。テオドシウス1世の代に、アタナシウス派キリスト教がローマの国教になった。そしてサーサーン朝ペルシャ同様、ローマも国教＝アタナシウス派キリスト教の下で慣習法＝ローマ法を統合し、国教会＝アタナシウス派キリスト教会(以後、たんに「キリスト教会」と呼ぶ)が裁判を担うようになる。その後聖職者数が増大し、キリスト教会が統治機構化した(コラム10)。

キリスト教会はローマ金貨とペルシャ銀貨の交換も仲介した。異なる財貨の交換が異なる物品貨幣の交換を容易にし、他方、財貨を保有する貴族等が土地売買や奴隷売買に関与するようになる。4世紀後半から、ローマの荘園数が増大しはじめる。

12世紀後半以降、売り手と買い手の関係が非対称化し、商品交換が不等価交換になる。そして「商い」が不可逆な位相構造を形成するが、もしも4世紀後半のローマ金貨とペルシャ銀貨の交換が同様な不等価交換であったとすれば、貨幣経済と商品経済の基本構造は同じである、と言うしかない。だが、ローマでもペルシャでも国教会＝統治機構が両替に関与していた。また、当時の財貨は商品的側面を有していない。すなわち、財貨は「制度」であり、金銀交換に交換差益＝クラス間交換差益は生じない。

したがって前節のコラム8で論じた「貨幣クラス」は商品クラスではない。貨幣経済下では、売り手と買い手の関係は対称で、交換は等価交換に準ずる等比交換になる。

(財産も貨幣クラスのメンバであるが、財貨と同類である。古代帝国では、金貨や銀貨による土地売買は土地分与の不正を是正する手段であり、奴隷売買は強制移動の代替手段である。古代帝国では、少数の富裕商人による商いを除けば、土地も奴隷も支配者層や官僚機構内でのみ循環する「財」であった。官僚機構と統治機構はちがうし官僚制度と統治制度もちがう。とはいえ統治機構は官僚機構の属性を継承し、統治制度は官僚制度の属性を継承する。中世帝国の統治制度が古代官僚制から属性を継承した結果、財貨が土地や奴隷を財産化したとも言える。「広義の近代」の突破期に奴隷が商品化するが、土地から金融商品が派生する場面があっても土地が商品化する場面はない。土地は概ね財産として残る)

ところで、3世紀のペルシャでサーサーン朝がアルサケス朝から王位を篡奪し、他方、ローマが三つに分裂したが、中国やインド、メソアメリカでも同様な「危機」が勃発している(日本でも同様な危機＝倭国大乱が勃発した)。

2世紀後半の中国＝東漢(後漢)で黄巾の乱が勃発し、その後三国時代がはじまる。2世紀後半から3世紀後半までの約100年で、中国の人口が7～10分の1に減少した。また3世紀前半～4世紀前半のインドで北方のアーリア人(おそらくアルサケス朝やクシャーン朝に仕えていたペルシャ人の集団)がサータヴァーハナ朝(アーンドラ朝)を滅ぼし、デカン高原とアラビア海沿岸の南西インドを支配する。そして4世紀初頭のメソアメリカでマヤ文明に大きな変化が生じている(ちなみに、古代ローマが交易した古代インドはサータヴァーハナ朝である。建国したのは非アーリア人＝ドラヴィダ人である)。

歴史家たちは、西ローマ帝国が減った5世紀後半から大航海時代がはじまる15世紀後半までの人類史を「中世」と呼んでいる。だが、2世紀後半から3世紀後半の世界各地で「グレート・リセット」が生じている(2～3世紀に地球規模の気候変動が生じた。それが「グレート・リセット」の原因かもしれない)。そして4世紀後半に新たなスキームの帝国＝中世帝国が誕生した。中世帝国の誕生を起点にすれば、中世は4世紀後半からはじまり、八十年戦争が勃発する16世紀後半まで続いたと考えるほうが妥当である。すなわち、中世は定説より100年以上早くはじまり、約100年長く続いた。以後、4世紀後半から16世紀後半までの人類史を「広義の中世」と呼ぶ。

サーサーン朝ペルシャは、アルダシール1世がアルサケス朝から王位を篡奪したときからはじまるが、中世帝国のスキームを確立したのはシャープール2世(在位309～379年)の代である。他方、ローマが中世帝国化したのはテオドシウス1世の代である。

中国で最初に誕生した中世帝国は北魏である。サーサーン朝ペルシャもローマも中世帝国のスキームを支える国教＝最高法規と国教会＝統治機構、財貨＝統治制度が不可欠であったが、魏普南北朝時代に華北を統一した北魏も同様である。北魏は仏教を国教化し、均田制を実施した。北魏の均田制はロー

マの軍管区制に相当する。同時代中国の南朝＝宋の国教も仏教であった。北魏の財貨は絹で、宋の財貨は銅貨である。北魏と宋の間で貨幣経済が誕生する。中世帝国と貨幣経済に着目すれば、「広義の中世」の起点を370年前後に置く筆者のレベル4パースペクティブは妥当である。

筆者のレベル4パースペクティブにしたがえば、「広義の中世」は770年前後に突破期に入る。750年、アブー・アッバースがウマイヤ朝アラブ帝国からカリフの座を篡奪してアッバース朝イスラーム帝国を開国した。その後アッバース朝イスラーム帝国は金銀複本位制を発明する。可逆な等比交換制度＝金銀複本位制は貨幣経済を中世帝国の内外に広げた。そして銀貨＝銀が秤量貨幣化し、統治制度から離脱して世界通貨になる。その後国教会が経済上の役割を喪失し、ユーラシア大陸西部の中世帝国＝ビザンツ帝国とユーラシア大陸東部の中世帝国＝南宋（あるいは北宋期の遼）が新たな統治制度＝封建制を発明する。他方、世界通貨＝銀の下で突厥やウイグルが中央アジアに王国を建国する。金銀複本位制と世界通貨に着目すれば、770～1170年前後を「広義の中世」の突破期と考える筆者のレベル4パースペクティブも妥当である。

「広義の中世」は1170年前後から成熟期に変遷し、「広義の近代」の出現期が重畳する。そして貨幣経済に商品経済が重畳して経済空間に位相構造を形成し、帝国が「世界帝国」に変貌する。神聖ローマ帝国やオスマン帝国、モンゴル帝国や明朝帝国（すなわち「世界帝国」）に着目し、また商品経済に着目すれば、1170年～1570年前後を「広義の中世」の成熟期と考え「広義の近代」の出現期が重畳すると考える筆者のレベル4パースペクティブも妥当である。

「広義の近代」は1570年前後に突破期に入り、貨幣経済と商品経済に市場経済が重畳して経済空間に代数構造を形成する。そして資本＝商人資本が誕生し、さらに産業資本と金融資本が誕生して経済空間が肥大しはじめる。その後「広義の近代」は成熟期に変遷し、「広義の現代」の出現期が重畳する。

筆者のレベル4パースペクティブにしたがえば、1970年前後から「広義の近代」の成熟期に重畳して「広義の現代」の出現期がはじまる。以後、レベル4パースペクティブの下で貨幣と商品、市場と資本の変化を論じる。言うまでもないが、筆者のレベル4パースペクティブは公文氏の三つのパースペクティブを内包している。

コラム9： 学徒ユリアヌスと皇帝ユリアヌス

ユリアヌスはコンスタンティヌス1世の異母弟ユリウスの次男で、ユリウスを殺害した当時のローマ皇帝コンスタンティヌス2世に軟禁され母方の実家（小アジア北西の黒海沿岸都市ビテュニア）で育つ。ニコメディア司教エウセビオスが彼をキリスト教徒として育てた。エウセビオスの死後、コンスタンティヌス2世は彼を幽閉するが、約6年後に解放する。自由の身になったユリアヌスはコンスタンティノープルやニコメディアでプラトン主義や新プラトン主義、ストア哲学を学び、短い期間であったがアカデメイアで古代ギリシャの自然学や哲学も学ぶ。そして自身を「ギリシャ人」と称するようになる。

355年、ユリアヌスはコンスタンティヌス2世に命じられ、ローマの副帝に即位してガリア地方に赴任した。そしてライン川以西の統治と防衛に携わる。コンスタンティヌス2世にとって、ユリアヌスの副帝即位は血縁者をガリア地方に置きコンスタンティヌス朝の権威を高める、といった程度の目的にすぎなかった。コンスタンティヌス2世は自身に臣従する文官や武官にガリア地方の政治と軍事を委ねるが、ユリアヌスは自身の意志と信条の下でライン川以西の統治と防衛を遂行する。

学徒ユリアヌスにとって、政治も軍事も「学問の奴隷」である。彼はガリア地方の腐敗を撲滅して華奢を抑制した。他方、ライン川両岸各地でゲルマン人（主にアラマンニ族）を撃退する。その後ユリアヌスはコンスタンティヌス2世と帝位を争うが、361年にコンスタンティヌス2世が病死し、ローマ皇帝に即位する。即位後、ユリアヌスはアリウス派キリスト教会の権益を剥奪し、減税を実施した。そしてペルシャ遠征に赴き戦死するが、このペルシャ遠征は謎が多い。

（故辻邦生氏の著書「背教者ユリアヌス（中央公論新社）」は名作である。マルクス・アウレリウス・アントニヌス（五賢帝のひとり）を敬愛していたユリアヌスは「学問の自由」を主張してアリウス派キリスト教会と対立した。「学問の自由」はストア哲学の精神と合致する）

コンスタンティヌス2世の代に、ローマ軍とサーサーン朝ペルシャ軍の戦闘が多発していた。ユリアヌスのペルシャ遠征はその延長である、と論じる歴史家や作家が多い（アリウス派キリスト教会の権益を剥奪したユリアヌスが、皇帝の権威を確立する上で行った遠征である、と論じる歴史家や作家もいる）。

だが、ユリアヌス以前のローマとサーサーン朝ペルシャの戦闘はアルメニア王国の支配をめぐる戦闘で、主な戦場はユーフラテス川上流域である。皇帝の権威を確立する上でサーサーン朝ペルシャと戦い戦勝する必要があったとしても、ユーフラテス川上流域で戦い戦勝すればよい。しかしユリアヌスは軍勢をアンティオキアに集結してペルシャ遠征に赴いている。目的地はサーサーン朝ペルシャの首都クテシフォン、すなわちセレウコス朝の旧都セレウキア近郊である。

ユリアヌスは、自身を「ギリシャ人」と称していた。それをプラトン主義や新プラトン主義、ストア哲学の影響によるものであると考えるのは単純すぎる。ペルシャ遠征で戦死するまで、ユリアヌスは戦闘で敗北したことがない。おそらく、カラカラ同様、ユリアヌスもアレクサンドロス3世を信奉していた。そしてアレクサンドロス3世がアケメネス朝ペルシャを征服したように、彼はサーサーン朝ペルシャを征服するつもりでいた。筆者は、それがペルシャ遠征の目的であった、と考える。

(当時のアンティオキアはキリスト教会の中心地で、アンティオキアで軍勢を集結したユリアヌスはキリスト教徒たちの反発に苦慮した。おそらくそのため、歴史家や作家たちはアンティオキアでのユリアヌスとキリスト教徒たちの論争にばかり着目し、アンティオキアがセレウコス朝の首都でクテンシオンがセレウコス朝の旧都セレウキア近郊であったという単純な事実に着目しない。歴史家や作家たちは、ユリアヌスが古代ギリシャ帝国＝ヘレニズム帝国を再建するつもりでいたとすれば、軍勢を集結する場所はアンティオキアがふさわしい、と考えたことがおそくない)

ところで、キリスト教会はユリアヌスを「背教者」と呼び、今も非難する場合がある。だがユリアヌスは、キリスト教徒を馬鹿にしたかもしれないが、キリスト教徒を弾圧したわけではない。ユリアヌスはキリスト教会の権益を剥奪し、すべての信仰を平等に扱ったにすぎない。彼はコンスタンティウス2世が追放したアタナシウス派の司教や司祭のコンスタンティノーブル帰還を許可している。

(コンスタンティヌス1世もコンスタンティウス2世もアリウス派キリスト教徒であった。ユリアヌスがアタナシウス派を容認し、その後ウァレンティニアヌス1世が彼の政策を継承する。そしてテオドシウス1世がアリウス派の司教や司祭をコンスタンティノーブルから追放した。カトリック教会やプロテスタント教会、東方正教会の聖職者たちがユリアヌスを「背教者」と呼ぶのは滑稽である。ユリアヌスがアタナシウス派のコンスタンティノーブル帰還を認めなければ、彼ら正統三派が「異端三派」になっていたかもしれない)

当時のローマは中世帝国化の初期段階で、皇帝が発行するローマ金貨の信用を支えペルシャ銀貨との交換を可能にする国教会＝統治機構が不可欠であった。ユリアヌスはそれに気づき、ローマ帝国などどうなってもよい、と思ったのかもしれない。

したがって筆者は、ユリアヌスは古代ギリシャ帝国＝ヘレニズム帝国の再建を目指したと考えるが、歴史家や作家たちが言うように、キリスト教会の権益を剥奪しながら皇帝の権威を確立するつもりでいたとすれば、ミトラ(ミトラス)教会がキリスト教会の役割を代替すると考えていた可能性がある。ミトラ教会がキリスト教会を代替すると考えていたとすれば、ユリアヌスは誠実な学徒であり賢帝であった、と言うしかない。とはいえ、ユリアヌスが長く皇帝を続け、ローマの国教がミトラ教になっていたとしても、後の人類史が大きく変わったとは思えない。重視すべきことは、キリスト教やミトラ教ではなく、国教と国教会である。

コラム10: アレクサンドリアの悲劇

キリスト教会は新プラトン主義やグノーシス主義も「異教」と判断した。ローマ皇帝テオドシウス1世は、「異教徒の祭典」であるとの理由で古代オリンピックを廃止し、アレクサンドリアのキリスト教会に異教の神殿や施設を破壊する許可を与える。415年、当時のアレクサンドリア教会総主教キュロスに扇動されたキリスト教徒たちが博物館や図書館を襲撃した。そしてアカデメイア・アレクサンドリア分校の校長を務めていたヒュパティアを惨殺する(ヒュパティアは新プラトン主義の哲学者で、マリー・キュリーに匹敵する女性科学者であったらしい。彼女はアストロラーベ＝天体観測儀やハイドロスコープを発明したと言われている)。

とはいえ、アレクサンドリアのキリスト教徒たちが暴徒化した原因は、キリスト教そのものにあるわけではない。原因はキリスト教が国教化したことにある。サーサーン朝ペルシャでも国教化したゾロアスター教が暴走している。たとえば、祭司長のキルデルが多数のキリスト教徒やユダヤ教徒、仏教徒やマニ教徒を殺害している(アルサケス朝ペルシャ王は、おそらくサーサーン朝ペルシャ王よりゾロアスター教に深く帰依していたと思えるが、アルサケス朝ペルシャが異教徒を弾圧した記録はない)。

中世化した帝国が慣習法を束ねる国教と財貨を支える国教会を発明し、国教会＝統治機構が国教＝最高法規の下で司祭や信徒の暴力を容認した。しかし同時代の中国(魏普南北朝時代の中国)でも仏教が国教化し、北朝と南朝の間で貨幣経済が誕生したが、中国の仏教徒が暴徒化する場面はない。中国の国教は仏教であったが、儒教や道教も国教であった。すなわち、中国では国教が一元していない。

中国の中世帝国は概ね遊牧民の征服王朝である。したがって帝国の支配体制が農耕民支配体制と遊牧民支配体制が混在する体制になる。中国が国教を一元できなかったのはそのためである。帝国の両面性、あるいは両義性を束ねる唯一の存在が皇帝であった。

国教の儒教一元を試みる皇帝もいたが、成功していない。たとえば、北魏は太武帝の代に宰相の崔浩が進言して廃仏を断行した。だが太武帝の死後、仏教が復興して国教化する。仏教復興の中心人物であった曇曜は「皇帝即如来」を唱えた。また同時代の南朝では、梁の武帝が「皇帝菩薩」などと呼ばれたりしている。「皇帝即如来」も「皇帝菩薩」も滑稽と言うしかないが、信仰が国教化すると暴力だけでなくそのような滑稽も信心になる。

中国では、北宋期に遼＝契丹が身分制＝封建制を発明し、農耕民支配と遊牧民支配がようやく一体化する。そして南宋期に儒教と道教、仏教が一体化し、明朝期に国教が一元する。とはいえこの「遅れ」は後進性を意味しない。北宋期や南宋期の中国の農業生産量や鉱工業生産量はヨーロッパやイスラーム圏を凌駕していた。識字率も中国のほうが高かったと思う。